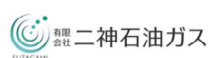


私たちは「台湾映画祭 in Kumamoto 2025」を応援しています。



(株)熊本ホテルキャッスル (株)サンソニック (株)日専連ツアーズ (株)日本旅行

台湾映画祭

TAIWAN Film Festival



台湾愛

映画で始まる

11.1土 - 2日

両日とも 10:30上映開始(10:00開場)

会場 CAMK熊本市現代美術館
アートロフト

料金 1作品 ¥1,000-(事前申し込み受付中)

上映作品

- 流麻溝十五号(2022年)
- 本日公休(2023年)
- 郷愁鐵路〜台湾、こころの旅〜(2023年)
- 太陽の子(2015年)

<主催> 熊本市中心商店街等連合協議会、上通商栄会、下通商栄会、新市街商店街振興組合、熊本市中央繁栄会連合会、熊本市駕町通り商店街振興組合、安政町商興会、銀座通繁栄会、シャワー通り商店会、水追町親和会、SAKURAMACHI Kumamoto
<共催> くま台湾 Neo「臺灣人在熊本の生活」(公財)熊本市美術文化振興財団、
<特別協力> 台北駐福岡経済文化弁事処、熊本台湾同郷会、平田 雄一郎・淑子 <協力> 台湾観光庁
<後援> 毎日新聞社、熊本市、(一財)熊本国際交流振興事業団、(一財)熊本国際観光コンベンション協会

今年の台湾映画祭は、実行委員会のメンバーで先ごろ急逝された田原誠也氏の遺志と共に開催いたします。

上映作品

作品選定協力

台湾映画コーディネーター 江口洋子
大東文化大学教授、ジャーナリスト 野嶋 剛

TAIWAN Film Festival

台湾映画祭 in KUMAMOTO 2025

流麻溝十五号

原題 『流麻溝十五號』

台湾/2022年/112分
監督/セロ・チョウ
出演/ユー・ペイチェン、リエン・ユエハン、シュー・リーウェンほか



©thuann Taiwan Film Corporation

蒋介石率いる国民党政府による戒厳令が敷かれていた「白色テロ」時代の台湾で、政治犯を収容していた「緑島」で生きる女性たちの姿を描いたヒューマンドラマ。

1953年、政治的弾圧が続く台湾では、政治犯は思想改造および教育・更生のため、緑島という難島に送られていた。連行された者は番号で呼ばれ、重労働を強いられた。絵を描くことが好きな高校生のユー・シンホエイ。子どもが生まれて間もなく投獄された看護師のイェン・シュエイシア。妹を守るため自ら囚人となったダンサーのチェン・ピン。次々と迫る不条理にも諦めることなく、台湾語、北京語、日本語などさまざまな言語を駆使しながら日々を生き延びようとする彼女たちだったが……。

本日公休

原題 『本日公休』

台湾/2023年/106分
監督/フー・ティエンユン
出演/ルー・シャオフェン、フー・モンポー、アニー・チェンほか



©2023 Bole Film Co., Ltd. ASOBI Production Co., Ltd. All Rights Reserved

台中の下町で40年にわたり理髪店を営むアールイ。彼女の3人の子どもたちは、すでにそれぞれの道を歩んでいるが心配は尽きない。台北でスタイリストをする長女シン、街のヘアサロンで美容師をする次女リン、一攫千金を夢見て定職に就かない長男ナン。皆、店にはなかなか顔を見せず、頼りになるのは、近くで自動車修理店を営む次女の元夫チュアンだけ。

そんなある日、アールイは店に「本日公休」の札を掲げ、愛用の理容道具を携えて、古びた愛車で出発する。偶然実家を訪れたシンは、母が店を休んでいる理由をナンやリンに聞くが誰も知らない。スマホは食卓に置きっぱなしで連絡も取れず、3人は母を案じていた。その頃アールイは、遠くの町に住む常連客が病床にあると聞き、出張散髪に向かっている途中で……。

郷愁鐵路～台湾、こころの旅～

原題 『南方、寂寞鐵道』

台湾/2023年/106分
監督/シャオ・ジュイジェン



© Pineal Culture Studio

台湾南部の鉄道路線「南迴線」。パイナップル畑や線路の近くまで迫る海など大自然の中をSLやディーゼル列車がのんびりと走り抜ける旅情豊かな路線だったが、2020年に全線で電化され、その様子は変化を遂げた。台湾でドキュメンタリー監督として活躍するシャオ・ジュイジェン監督が4年の歳月をかけ、失われていく沿線の原風景と鉄道をカメラにおさめ、鉄道員やその家族、「南迴線」を愛する人々の想いを記録として残した。

本作を完成させるため、台湾映画界を代表する精鋭スタッフ陣が集結。4年間撮りためた膨大な映像を巧みにつなぎ合わせたのはチェン・ボーウェン。さまざまな列車の走行音を繊細に映像に載せたのは音響の巨匠ドウ・ドゥーチャー。そして台湾民謡の要素を取り入れた音楽は、是枝裕和監督『幻の光』などの音楽を手掛けたチェン・ミンジャンが作曲している。

太陽の子

原題 『太陽的孩子』

台湾/2015年/99分
監督/チェン・ヨウチュエ
出演/アロ・カリティン・パチラル、ウー・イェンズー、リン・ジャジュンほか



©一期一会影像製作有限公司

台湾の先住民族・アミ族の女性・バナイは、ニュース専門テレビ局で働くジャーナリスト。台湾の東海岸・花蓮にある故郷に2人の子供を残して、台北で忙しい日々を送っていた。

ある日、バナイに代わり子供たちの面倒を見ていた彼女の父親が病に倒れる。休暇を取って故郷に戻ったバナイは、村の土地がホテル開発によって失われようとしていることを目撃する。集落では開発賛成派と反対派の間で意見が対立し、議論は平行線をたどる。故郷の人々だけでなく、バナイの家族も二つに割れてしまう中、彼女は故郷に戻る決心を固め、台北での仕事を捨てる。「バナイ=稲穂」という自分の名前の由来でもある稲作の復活に賭けることにしたのだ。バナイの決意には、漢民族化されて自らの名前を失いつつあった先住民の誇りと伝統を、なんとか取り戻したいという願いが込められていた。

上映スケジュール

上映開始時間	11.1
10:30	『本日公休』(106分)
12:45	『郷愁鐵路～台湾、こころの旅～』(106分)
15:00	『太陽の子』(99分)
17:00	『流麻溝十五号』(112分)

上映開始時間	11.2
10:30	『郷愁鐵路～台湾、こころの旅～』(106分)
12:45	『流麻溝十五号』(112分)
15:30	『太陽の子』(99分)
17:20	野嶋剛さんトークイベント(60分)

野嶋 剛さんトークイベント

11.2 15:30～ 入場無料



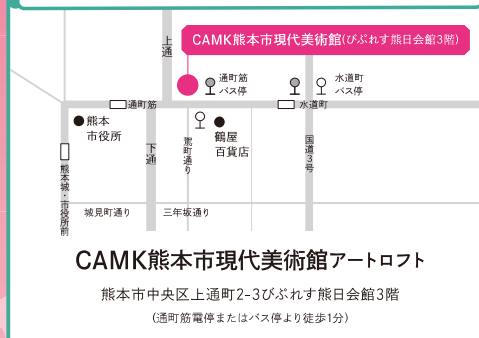
『太陽の子』の日本上映権を持ち、台湾映画に関する著書も出しているジャーナリストの野嶋剛さんに、作品やその背景を解説していただくと共に、近年の台湾映画の特徴や傾向についても話を伺います。

<Profile>

1965年、福岡県出身。朝日新聞社に入社し、台北支局長などを経て2016年からフリージャーナリストとして活動。台湾、香港、中国問題に関する著書や論評も多数。台湾映画に関する造詣も深く、2015年には「認識・TAIWAN・電影映画で知る台湾」(明石書店)を出版。大東文化大学社会学部教授。

野嶋剛オフィシャルウェブサイト
<https://nojimatsuyoshi.com/>

上映会場



CAMK熊本市現代美術館アートロフト

熊本市中央区上通町2-3 びふれす熊日会館3階
(通町筋電停またはバス停より徒歩1分)

料金 1作品 ¥1,000- (税込)

中高大学生は500円でご入場いただけます
(当日、学生証をご提示ください)

○小学生以下無料

○身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方は500円でご入場いただけます。
付き添いの方1名様も500円でご入場いただけます。



映画祭に関する
情報はコチラ



チケットの事前申し込み
フォームはコチラ

問い合わせ先 【映画祭事務局】熊本市中心商店街等連合協議会

担当：馬場口 TEL:080-4200-5824 (平日10:00～17:00)